

## カキを加害するアザミウマ類とその発消長

桜井 精

Sei SAKURAI: Thrips injurious to persimmon fruit in Niigata Prefecture,  
and their seasonal abundances

### Summary

Seven species of Thysanoptera were collected from persimmon fruits and leaves in Niigata Prefecture. Those were *Scirtothrips dorsalis* Hood, *Frankliniella intonsa* Trybom, *Thrips flavus* Schrank, *Thrips hawaiiensis* Morgan, *Thrips setosus* Moulton, and *Haplothrips chinensis* Priesner. Among them *S. dorsalis* was considered as the major pest from its abundance. It was abundant on fruits in June and July, and on leaves in September and October. Yellow sticky board trap was effective to determine its seasonal abundance.

渋柿「平核無」がアザミウマの加害を受けると、果頂部付近から蒂にかけて帯状の食害痕が付き外観が悪くなり、商品価値が落ちるだけでなく、脱渋後の軟化が早くなる。

新潟県における「おけさ柿」(「平核無」)栽培でも年によりアザミウマによる被害が多く、その対策が大きな問題となっている。しかし、本県においてはカキを加害するアザミウマ類についての調査はほとんど無く、その生態については不明な点が多い。そこで、本年は加害種を明らかにすることに重点をおいて調査を行ったので、その結果を報告する。

快く同定の労をとられた慶応義塾高等学校の采川昌昭博士、東京農業大学昆虫学教室の岡島秀治博士に心から感謝する。

### 調査方法

調査は主として西蒲原郡巻町竹野町の放任園で行った。6月上旬から10月下旬まで、原則として5日毎に果実100個と新梢5本を採取し、持ち帰って実験室で20%アルコールに浸漬して寄生しているアザミウマ類を洗い落とし、浸漬液をろ過して計数した。また、得られた個体は全てプレバート標本にして種類を同定した。

佐渡郡でも放任に近い園から適宜サンプルを採取して同様に調査した。

また、巻町では園内に3種類のトラップを設置して捕獲されるアザミウマ類を調査した。期間は6月上旬から10月下旬までで、原則として5日毎に調査した。なお、

得られた個体は全てプレバート標本にして種類を同定した。トラップの種類は次のとおり。

1 黄色粘着板 8.5cm×25.0cmのタキロン製黄色塩化ビニール板(マンセル6.5Y 8.5/15.0)を調査圃場の樹間に南向きに設置した。

2 黄色水盤 33cm×33cm×10cmのセクスイ製黄色コンテナ(マンセル1.0Y 7.8/14.0)を樹間に設置した。

3 誘引剤トラップ アニスアルデヒドとシンナムアルデヒドの等量混合液を塩化ビニール製のカプセルに入れて樹冠内に設置した。

### 結果および考察

1 主要加害種 カキに寄生するアザミウマとしてはクロトンアザミウマ、アカオビアザミウマ、チャノクロアザミウマ、チャノキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ムツテンアザミウマ、マメハナアザミウマ、ビワハナアザミウマ、ハナアザミウマ、ダイズウスイロアザミウマ、シナクダアザミウマ、カキクダアザミウマの12種類が知られている(1,2,3,5,7)。今回の調査では、カキの果実ではチャノキイロアザミウマ、マメハナアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ハナアザミウマ、ダイズウスイロアザミウマ、キイロハナアザミウマ、シナクダアザミウマの6種の寄生が、また葉ではチャノキイロアザミウマ、ダイズウスイロアザミウマ、シナクダアザミウマの寄生が認められた(第1表)。この中でキイロハナアザミウマの寄生はカキでは初めて確認された。寄生を認めたアザミウマ類の中でチャノキイロアザミウマの占める割合は果実では90.3%、葉では99.7%であり、これが主要加害種と言える。カンキツ類をはじめ、ブドウ、カキ

Table 1. Number of thrips collected from persimmon tree in Niigata Pref. (1984).

Species	MAKI		SADO	
	Fruits	Leaves	Fruits	Leaves
<b>Adult</b>				
<i>Scirtothrips dorsalis</i> Hood	586399	278810399	1299	488499
<i>Taeniothrips distalis</i> Karny			299	
<i>Frankliniella intonsa</i> Trybom	299		299	
<i>Thrips hawaiiensis</i> Morgan			19	
<i>Thrips flavus</i> Schrank	19			
<i>Thrips setosus</i> Moulton		18 19		
<i>Haplothrips chinensis</i> Priesner		18	18 299	
<b>Larva</b>				
<i>Scirtothrips dorsalis</i> Hood	49	1259	1	5
unknown 種名不詳	2	1		

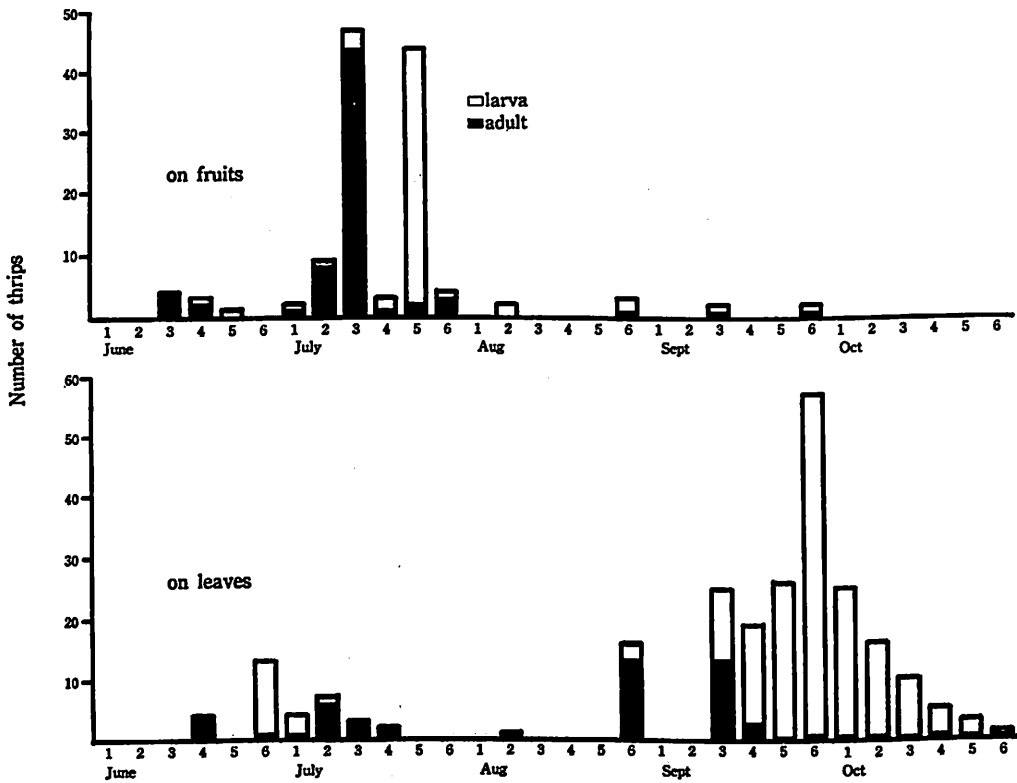


Fig. 1 Seasonal changes in number of *Scirtothrips dorsalis* collected every 5 days on persimmon tree at Maki, Niigata Pref. (1984).

などを加害するアザミウマ類の主要加害種はチャノキイロアザミウマであることは既に報告されており<sup>1,7,8)</sup>、本県でもその結果は同じであった。なお、6月中旬と7月上旬に果実及び葉から極めて少数ながら他種の幼虫も見出され、開花期前後には数種類が加害することがわかった。

小木町翠浦で行った落花直後の果実調査では、マメハナアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、シナクダアザミウマの寄生が見られたが、これら3種は周辺のアカツメ

クサ、シロツメクサの花に多数認められたことから、開花～落花期頃には周辺の植生の影響も大きいものと考えられる。

本年は調査開始が遅かったために春の発芽期直後の若葉については明らかでないが、6月の開花期には結果枝の硬化した葉にはアザミウマ類の寄生は見られず、枝の切り口などに発生する不定芽が伸長した枝についている若葉にアザミウマ類の寄生が見られた。

2 寄生消長 主要加害種であるチャノキイロアザミ

ウマの果実での寄生は、6月中旬の開花期に少数認められた後減少したが、7月になって増加しかなり多数の寄生が認められた。その後は9月末まで極めて少数ながら寄生が続いた。一方、不定芽が伸長した枝についている展葉直後の若葉では6~7月にも寄生は見られるものの、9~10月の寄生が多かった(第1図)。

福田ら<sup>1)</sup>は開花期前後が主要防除時期であるとしており、柳沼ら<sup>11)</sup>は被害発現の様子から8月まで防除が必要としている。今回の調査では果実で7月に成幼虫の寄生が多かったこと及び果実の肥大と被害の発生部位の関係から、防除は開花期前後だけでなく7月下旬まで必要と考えられた。しかし、年によりアザミウマ類の発生状況が異なると思われるので、防除時期についてはさらに将来の調査を待たねばならない。

東海近畿地方とはカキの生育時期及び気候が本県とは異なるため直接の比較は難しいが、和歌山県での調査ではカキの開花直前の5月と7月に寄生が多くなっており<sup>8)</sup>、本県のように9~10月にかけての寄生数の増加は見られていない。また静岡県のカキの果実では6月から10月まで連続して寄生が見られており<sup>9)</sup>、カキとはかなり異なった様相を示している。これらの相異については、

互いに1か年のデータの比較でもあるため、その原因については明かでない。

3 **トラップによる発生消長** 黄色粘着板による調査ではチャノキイロアザミウマの成虫は6月から10月まではほぼ連続して捕獲されたが、7~8月の捕獲数が多かった。捕獲数はおよそ4半旬で増減を繰り返す、6月第5半旬、7月第3半旬、8月第1・6半旬、9月第3・6半旬、10月第3半旬にピークが見られた。静岡県のミカン園の調査でもほぼ同時期にピークが見られており<sup>9)</sup>、作物上の寄生消長のような差は見られない。なお黄色粘着板で捕獲されたアザミウマ類の44%がチャノキイロアザミウマであり、アザミウマ類合計の捕獲数の推移とチャノキイロアザミウマの捕獲数の推移ははかなり良く一致していた(第2図)。

黄色水盤による調査ではアザミウマ類合計の推移は黄色粘着板での推移とはほぼ同様であった。しかし、チャノキイロアザミウマは捕獲されたアザミウマ類合計の3%にすぎなかったが、僅かに捕獲の見られた時期は黄色粘着板のピークとほぼ一致していた。黄色水盤でのアザミウマ類の捕獲数が黄色粘着板より少ないのは、色彩が異なるためか、あるいは設置方法が異なるためか明らかでない。

アルデヒド誘引剤トラップではアザミウマ類の誘殺数は他のトラップより多かった。しかし、チャノキイロアザミウマは僅か2匹誘殺されただけで、その消長は全く不明であり、チャノキイロアザミウマの調査には不向きであった。

摘 要

新潟県巻町などでカキを加害するアザミウマ類の種類とその発生消長について調査を行った。

1 カキの果実及び葉から7種のアザミウマが採集された。このうち寄生数の最も多いチャノキイロアザミウマが主要加害種と考えられた。

2 カキ果実での寄生は開花期と7月に多く、8月以降は極めて少なかった。葉では新葉にのみ見られ、硬化した葉ではアザミウマ類の寄生は見られず、6~7月より9~10月の寄生が多かった。

3 トラップは黄色粘着板の効率が良く、アザミウマ類合計の推移とチャノキイロアザミウマの推移はほぼ同様であった。

引用文献

1) 福田仁郎・飯久保昌一・奥代重敬(1954)所謂柿の「えかき」について。東海近畿農試研報, 園芸(2): 172~187. 2) K. Haga & S. Okajima (1983) A new

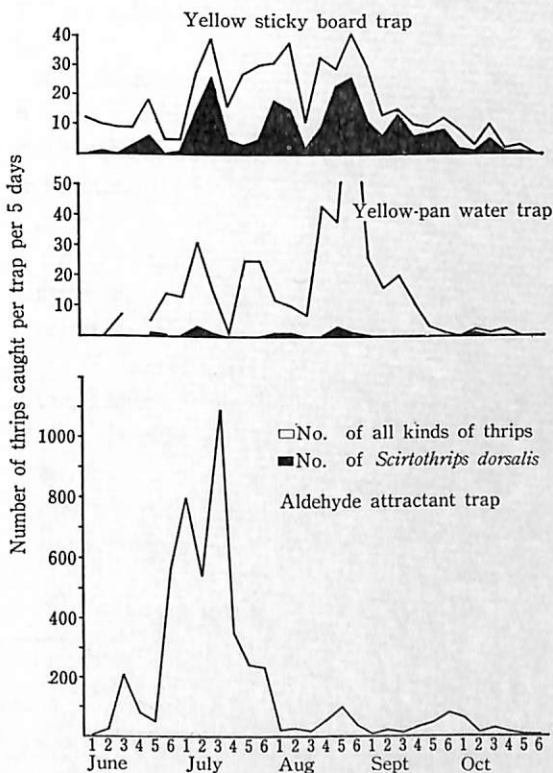


Fig. 2 Seasonal abundance of thrips caught by three kinds of trap at Maki, Niigata Pref. (1984).

genus and species of Phlaeothripidae (Thysanoptera) harmful to persimmon from Japan. *Annotationes Zoologicae Japonenses* 56(3): 241~245.

3) 逸見 尚・橋本修二 (1984) カキクダアザミウマの生態・被害と防除対策. *植物防疫* 38(7): 312~315.

4) 工藤 巖 (1983) チャノキイロアザミウマとミナミキイロアザミウマを形態の似た種類と区別する方法. *今月の農業* 27(1): 70~76.

5) 黒沢三樹男 (1986) 日本産総翅類の研究. *Ins. Matsum. Suppl.* 4. 95pp.

6) 采川昌昭 (1972) 農作物を加害するアザミウマ類の見分け方. *植物防疫* 26(1): 457~462.

7) 采川昌昭 (1978) 果樹を加害するアザミウマ類について. 今月

の農業 22(6): 92~100. 8) 高木一夫・西野 操

・宮原 実・上田登四郎 (1972) チャノキイロアザミウマによる永年性作物の被害と対策. *植物防疫* 26(1): 429~438.

9) 多々良明夫・古橋嘉一 (1985) チャノキイロアザミウマのカンキツ園における発生消長. *関西病虫研報* 27: 52.

10) 柳沼 薫・佐藤力郎・熊倉正昭 (1982) チャノキイロアザミウマ成虫の誘殺法について. *北日本病虫研報* 33: 155.

11) 柳沼 薫・佐藤力郎・菅野和彦・熊倉正昭 (1983) カキに対するチャノキイロアザミウマの加害時期と被害発現の関連.

*北日本病虫研報* 34: 138. (1985年8月14日受領)